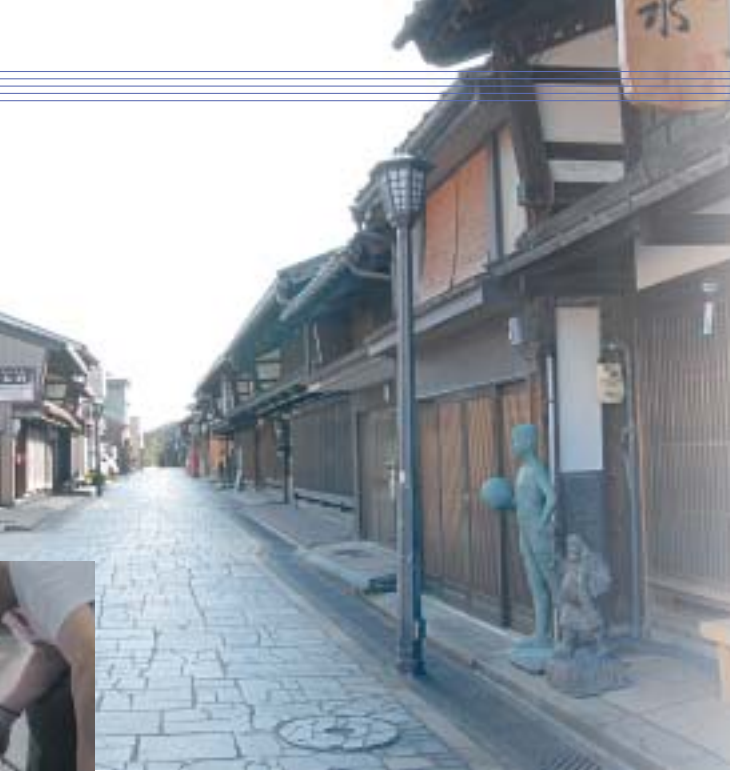


# 伝統技術を生かし、 新たなものづくりに挑む

たかおか

# 高岡

北陸を代表する工芸都市、富山県高岡市。古くから銅器、漆器などの伝統工芸が息づくこのまちで、ものづくりの新たな動きが始まっているという。伝統的な技術を受け継ぎながら、新たな発想でものづくりに挑む高岡の取り組みを追った。



高岡鑄物発祥の地・金屋町。高岡銅器の起源は約四百年前、二代加賀藩主・前田利長公がこの地に鑄物工場を開設したことにさかのぼる。



高岡駅ホームの銅像

日本三大仏のひとつ「高岡大仏」

## Topics



### 子供たちの鑄物体験授業

(財)高岡地域地場産業センター

高岡市では平成十八年度から、市内の小、中、養護学校に「ものづくり・デザイン科」を創設。年間約五千人の子供たちが鑄物体験などを通じ、地元の伝統工芸への理解を深めている。

「授業を通じてものづくりに触れることで、地元の伝統工芸を再認識し、十年後、二十年後にたくさんその後継者が生まれてくれるといいですね」

(高岡地域地場産業センター・総務課長 大和松雄氏)

江戸時代より熟練した鑄物職人が集まる高岡は、工芸品、仏具、銅像、梵鐘などの銅鑄物のまちとして知られている。市内には原型、鑄造、研磨、彫金、仕上げ、着色など工程別の小規模な工場が二百軒以上もあり、銅製鑄物の全国シェア約九十%を誇っている。

しかし近年では、生活様式の変化などから銅器の需要は減ってきているという。いま高岡では、伝統の技術を生かしながら現代のニーズにあつたものづくりをめざし、さまざまな取り組みが行われている。銅のまち・高岡の新たな挑戦をレポートすべく、本誌取材班は高岡市内を駆けめぐった。

## 伝統技術が生きたる新しいデザイン

まず、同市で伝統工芸の継承、人材育成、デザイン開発などの活動を行う高岡市デザイン・工芸センターを訪れ、末坂 幸子所長にお話をうかがった。末坂所長は高岡銅器の現状を分析し、次のように言われる。

「高岡銅器の需要が減少してきた大きな理由は、居住空間やライフスタイルの変化だと考えています。現代では集合

住宅が増え、床の間のある和室を持つ住宅は少なくなり、また冠婚葬祭を家庭で行うことが少なくなり、行事のために室内を飾ることもなくなりました。そうすると花器や置物など、従来、高岡が得意としていた工芸品が家庭に入るチャンスがなくなってしまうのです。高岡が工芸のまちとして持つ多くの財産を今後も生かしていくためには、現代の感性や生活様式にあわせた工夫が必要だと考えています」

このようななか、銅器の間屋、職人、デザイナーなどが連携し、新しいデザインや商品の開発に取り組み活動が始まっている。たとえば、同センターの呼びかけにより「技術を売る」をキーワードに間屋、職人が共同出資して二〇一三年に設立された「(有)ハイヒル」は、金属、ガラス、漆などのマテリアルプレート(表面処理見本)を商品化。建築、インテリア業界などをターゲットに、高岡銅器の特長である伝統的技法による着色技術などをアピールしている。また、高岡銅器の作家やメーカー、問屋など各分野の専門家で結成された「高岡工作連盟」は企画からデザイン、製造、流通、販売の全工程を参加者全員で学び、時代に即したもののづくりシステムの構築をめざしている。

その他にも、高岡市ではクラフト作品を公募する「工芸



鑄造技術の特長を生かした表札



気軽に挑戦できるミニサイズの胸像



東京都JR亀有駅前に設置された「両津勘吉」像



銅や漆の様々な色調を提案するマテリアルプレート(ハイヒル)



コンパクトでモダンな新しい仏壇「かたり箱」(灯華香)

※高岡工作連盟のうち三社の企業グループ



職人技が光る鑄造の様子



株式会社竹中製作所 代表取締役社長 竹中 伸行氏

「低価格を実現した。その他にも、アニメなどで人気のキャラクター銅像の製造も行っている。これまでに「ゲゲの鬼太郎」、こちら

高岡の銅器メーカーも時代に即した商品開発に積極的に入り組んでいる。同市で美術銅器や非鉄建材の製造・販売を行う株式会社竹中製作所を訪れた。「これからは、鑄造の特長を生かした製品づくりに力を入れていきたいと考えています。鑄造の良いところは精密な表現力と少量・多品種生産に対応できることです。これらの特長を生かし、現在は建材分野の商品開発に力を注いでいます」と同社代表取締役社長・竹中伸行氏は言われる。そのひとつとして同社が開発した銅合金鑄物製の表札は、周囲の飾りの部分は本物のブドウから型をとり、リアルな形状を表現。個々の名前の部分は発泡スチロール製の原型を使い、低コストでオリジナル性の高い製品を実現している。また、鑄造品の市場を広げるため、低価格なミニ胸像のオーダーも受け付けている。同製品は機械を使ってモデルの三次元データをとり、型をつくる方法でこれまでにな

### 鑄造の特長を武器に新分野を開拓

「伝統工芸産業は現状の厳しさはありますが、このような活動を通じ、新しい製品、新しい人材が少しずつ育っていると感じています」と語られた。



高岡市デザイン・工芸センター 所長 末坂 幸子氏

都市高岡クラフトコン「ペティション」を毎年開催し、作家たちが世に出る後押しをしているという。末坂氏はこれまでの活動を振り返り、

### 建築・インテリア分野にも活躍

### 高岡銅器の伝統的着色技術



折井着色所 折井 宏司さん

葛飾区亀有公園前派出所の「両さん」などの像が製作されており、地域の商店街などから人気を集めているという。竹中社長は、「現在は、試行錯誤をしながら新しいものづくりに取り組んでいる最中です。これらの商品を入り口に、鑄造品に親しみをもってもらい、新たな市場をつくっていきたくと考えています」と今後の高岡銅器への想いを語られた。

伝統技術によって生み出される美しい銅器の数々。そのすばらしさは改めて心を動かされるものがあった。いま、高岡銅器は多くの人々に支えられながら、時代にあつた柔軟な発想で進化しようとしている。その新たな挑戦が多くの人々に支持され、さまざまな形で広がりを見せていくことを期待したい。

高岡銅器の特長のひとつに、伝統的な技法を用いた着色がある。これは古くから伝わるさまざまな技法や薬品を使い、銅合金鑄物の表面を化学変化させて色合いを引き出すもので、その色合いには青銅色、おはぐろ色(赤や茶褐色)などがある。これらの技術は、職人や各々の着色所で伝承されるもので、やり方は千差万別だという。家業を受け継ぎ、高岡で銅器の着色を行う折井 宏司さんは、銅器だけでなく銅の圧延板にさまざまな色のパターンを安定的に発色させることを研究し、建材分野でも着色技術の普及を図っている。

「圧延板に興味を持ったデザイナーやデザイナーの方が高岡に来て、伝統的な銅器に関心をもってくださることもあります。このような相乗効果で高岡の伝統工芸を盛り上げていければと考えています」

折井さんが着色した銅板は市内の飲食店の内装に使われている